

Title	フィジー人とキリスト教：キリスト教と「他界観」 そのII：キリスト教活動の実状とフィジー人のアイ デンティティ
Author(s)	橋本, 和也
Citation	年報人間科学. 1987, 8, p. 145-163
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/9989">https://doi.org/10.18910/9989</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪大学人間科学部（一九八七年二月）

『年報人間科学』第八号 一四頁—一六頁

# ファイジー人とキリスト教 キリスト教と「他界観」そのII

——キリスト教活動の実状と

ファイジー人のアイデンティティ——

橋 本 和 也

## フィジー人とキリスト教

### キリスト教と「他界観」 そのII

#### ——キリスト教活動の実状とフィジー人のアイデンティティ——

フィジーにキリスト教が始めて拠点を持ったのは一五〇年前である。前論文「キリスト教と『他界観』」（本誌七号）で述べた如く、フィジーではキリスト教はまず大首長に受け入れられた。大首長の改宗と同時に臣下の小首長達と支配下にある全村がキリスト教徒となった。現在ではフィジー人全てがキリスト教徒であり、村落内でキリスト教会に關係する予算は、村の予算を上回っている。教会活動は、村人の生活の中にしつかり根をおろし、社会生活のリズムの基調となり、精神的な支えとなり、かつフィジー人としてのアイデンティティの基盤となっている。

本論では、人口の半分以上を占めるインド人移民を抱える(1)複合社会における信仰と、アイデンティティの問題についてまず述べる。次に首長・平民という上下關係、対等者同士の關係など(2)社会關係に見られる「氣前の良さ」を名譽と考える信条と、(3)儀礼的關係に見

られる伝統——首長制擁護の心情が、フィジー人の拠り所となつてい  
ることを検討する。そして、最後に、(4)フィジー文化を積極的に擁  
護、發展させているキリスト教の活動を述べ、フィジー文化——キリ  
スト教という等式が成立し、それが彼らのアイデンティティの基盤  
となつていふことを示していきたい。

#### (1)複合社会と信仰——アイデンティティの問題——

フィジーには、メソヂイスト、カトリック、セヴンス・デイ・アド  
ヴァンティスト、アセンブリーズ・オブ・ゴッド等の他にも多く  
のキリスト教の宗派<sup>①</sup>がある。しかしほとんどの宗派では、宗派は  
違つても皆キリスト教だと、分裂よりも連帯を強調している。特に  
キリスト教徒の七四パーセントを占めるメソヂイスト派は、村在住  
の他の宗派の信者に寛容であり、クリスマス前の連夜のミサでは、

一夜か二夜他宗派の説教者を招いて儀礼をまかせている所もある。「宗派は違つても皆キリスト教徒である」。この言葉には、宗派は違つても皆フィジー人であり、共に一つ村に住む仲間であるという言葉の意味が含まれている。

フィジーは多民族国家である。国は土着のフィジー人のものであり、土地の八〇パーセント以上が彼らのものであるが、人口の半数以上は、英国植民地時代の統治政策の下で南部インドから移民して来たインド人の子孫が占めている。彼らはフィジーの商業・経済のほとんどを握っており、彼らがフィジーを南太平洋諸国の中で政治・経済面での中心的な国にしていると言ふことができる。インド人以外にも、今だに植民地時代からの影響力を持つ英国、経済的影響力を及ぼすオーストラリアやアメリカ等の白人、レストランや雑貨屋を営む中国人、留学や働きに来ている南太平洋諸国の人々がいる。この中で宗教的に特に問題となるのは、インド人である。ヒンドゥ教徒が八〇パーセント、イスラム教徒一五パーセント<sup>(2)</sup>（キリスト教徒は四パーセント）であり、全員がキリスト教徒であるフィジー人には、ヒンドゥ教やイスラム教は全くの異教であり、その教義や行事についてはほとんど理解を示していない。

政治的には、与党も第一野党もフィジー人とインド人との協力・共存を主張し、インド人追放を叫ぶフィジー人ナシヨナリストは前回の選挙で国会の議席を失っている。現在首相と総督はフィジー土着のいくらかの有力な首長達から選ばれている。大臣や政府の要職はフィジー人とインド人が分担している。この両者が衝突する場所

は、役所や職場である。特に上司にインド人を持つフィジー人は、不満と憤懣を抱いている。職場をやめても、村に帰れば気楽な生活が待っているフィジー人には、日頃の不満を酒の席で爆発させ、上司を殴つてやめていったという話が尽きない。フィジー人が生活を送っている村落という時間と空間内では、インド人が介入してくる領域は限定されている。インド人の雑貨屋での買物や、インド人運転手のバスへの乗車等、常に村の境界部分での接触にしか過ぎない。また砂糖キビ栽培のためインド人に土地を貸している氏族もあるが、彼らは主に地方の土地管理局を通して交渉しており、直接的な関係を持つことはない。ただ例外的に、フィジー人が自氏族から土地を借り、それをインド人小作に耕させるという場合にだけ個人的な関係が生じている。

フィジー人社会は常に外に開かれているが、私生児の問題は深刻である。筆者の滞在した村では独身の二十才以上の娘には必ず一人かそれ以上の私生児がいた。子供達は皆祖父父母の息子として登録され、私生児としての不便を蒙ることはない。その父親としてはフィジー人のほか、白人、日本人などがあるが、インド人との混血はほとんど見かけられない。結婚相手として白人は勿論多いが、異教徒であっても中国人との例はよく見られる。しかしインド人とはほとんどない。その主な原因はインド人社会にある。インド人にとって異教徒とは排除すべき対象であり、フィジー人男性と結婚したインド人娘を親族一同が非難し、夫の村に追いやつた事例がある。彼女はキリスト教に改宗し、フィジー人の村に住んでいる。

フィジー・インド人は、一八七四年にフィジーが英国に国を移譲した後、植民地政策の下で、労働力として五年契約で徴集されたインド南部からの移民の子孫である。一八七九—一九一六年の間に六万人がやって来た<sup>③</sup>。彼らは契約終了後もフィジーに残り、その子孫が今では土着のフィジー人の人口を上回っている<sup>④</sup>。面積は四国程の広さで、そのほとんどをフィジー人が氏族 (matagali) 単位で所有し、売買は法律で禁じられている。通常インド人農夫は三十年単位で土地を借りている。契約更新時に再び契約を更新できる保証がなく、土地を離れて都市で商売を始めるインド人が多い。

現代では三世代以上経つインド人移民の若者達は、もはやヒンドゥ語を会話程度しか話せなくなっている。宗教はほとんどがヒンドゥ教徒だが、選挙などの特別な機会や南インド系の寺院が行なう火渡り等の機会がない限り、強く意識されることがないとの報告がある<sup>⑤</sup>。しかし、対イスラム教徒や対キリスト教徒との関係では、宗教が意識されることがないとは言えない。

フィジー・インド人にとって、彼らのアイデンティティを殊更に強調すべき基盤がなくなっている現実が、フィジー人にナシヨナリズムを殊更叫ぶ必要性を感じさせぬ原因であるとも言える。しかし、フィジー文化は土地の文化であり、土地制度と村落生活が崩壊しない限り、文化的基盤は健在であり、必要な時にはアイデンティティの強力な支えとなる。この土地の文化を包み込んでいるのが、キリスト教会である。特にメソヂイストとカトリックは、教義も規制もゆるやかで、土地の風習を認め、古い信仰を決して認めてはいない

が、存在を黙認しているところがある。そこにキリスト教—フィジー文化という等式が成立する実状がある。

(2) 社会関係とそれを支える「ソリ (贈与)」の信条

—— 社会構造と教会組織 ——

(a) 社会構造

(i) 垂直軸上の関係

フィジーの社会関係は、首長—臣下という垂直軸上の関係と、対等な氏族間、氏族内の水平軸上の関係とによって織りなされている。

フィジー社会全体を見ると、垂直軸上では、二つの構造が重層的に存在している。一方は、他民族をも含めた全国的な行政組織で、首相、大臣、役人、地方長官、各村の村役という系列をたどる。村では働きざかりの三十代後半から四十代の既婚の男性が村役 (Etiaga ni Koro) に選ばれる。これは名誉職で、地方の行政機関と村との橋渡し役である。村では村会の開催を知らせたり、村全体の仕事に男達を呼び集める役をする。村役はその役割だけが決まっており、地位は明確ではない。年令的に各氏族長より若い者が任命されるので、仕事の内容とは別に年長者よりなる氏族長会議の成員より下の位置になる。

もう一つの構造は、大首長を頭に頂く伝統的な首長制である。フィジーには外来王の伝説が多くある。筆者が実地調査をしたワイテイ・レウ本島東海岸にあるワイワ島では、先住の三氏族が住んでいた所を、ロコ・トゥイ・ヴィワが征服した。その後戦士と大工の氏

族を呼び寄せた。現在まで土地の首長を中心とする三氏族とロコ・トウイ・ヴィワという由緒ある大首長を中心とする三氏族が、ヴィワ島に住んでいる。現在では大首長の称号継承権を持たぬ人物を除いては、特別に扱われることはない。特に氏族間では、関係は対等である。

大首長や土地の首長が村に居る場合には、村内の地位は、大首長（ロコ・トウイ・ヴィワ）―土地の首長（サウ・トゥランガ）―氏族長―村民という順序になる。しかし、年長者はこの世襲的な地位を超えて尊敬される。ここに階層原理と年長原理の二つが見られ、両者が重なった最高位にロコ・トウイ・ヴィワが居る。キリスト教以前なら大首長が村民の生殺与奪の権利を持っていたが、現代では単なる象徴的存在にすぎぬ首長も多い。土地をホテルに貸している首長とか、由緒がありかつ学歴のある首長には、土地のリース料が優先的に入ってきたり、政府内で要職につく機会がある。しかし大部分の首長は、儀礼的贈与交換の場合にその存在が強く印象付けられるだけである。現在でも各地域の最高首長の名の下で品物が集められ、交換され、再分配される。フィジーには昔いくつかの勢力圏 (mataniu) があった。ヴィワ島は隣島のムバウ島を中心とするマタニツに属し、ムバウ島にとっての最も有力な同盟村であった。現在でもムバウ島で全国規模の贈与交換がある時には、昔のマタニツ単位で品物が集められ、交換される。マタニツも戦争時代には大きな意味を持っていたが、今では首長同様、地域の連帯を示す象徴となっており、大きな交換の機会でもない限り実際に見て取ること

ができないものである。

フィジー社会では首長を頂点とする社会構造が、垂直軸上の関係を規定し、敬語体系(尊敬を示す複数形や *gagana* という敬語の使用)や様々な敬意を示す行為(片膝をついて手を三回叩く)などが、文化の体系の中に深く埋め込まれているのが分かる。キリスト教会も、布教の戦略的理由と、宣教師の本国も王制であるという事情から、首長制を全面的に認めていた。

#### (ii) 水平軸上の関係

水平軸上に見られる社会関係には、バランスのとれた互酬性が見られる。観察者には、日常生活での貸し借りは長い間にはほぼバランスがとれると説明し得る。しかし、行為者は、与えること (give) を強調する。自分から頼みに行くこと (kerakera) が語られることはない。また、フィジー人全体に言えることだが、知人や親類から何物かを頼まれた時、その品物があるのに与えないことは「恥 (madua)」だと考えられている。与えることを義務と考えているのでフィジー人の商売は、特に雑貨店の場合には、ほとんどが代金の回収ができなくて失敗している。

これがフィジー人の生活を低い水準で平均化していると批判を受けているケレケレ(要求)システムである。しかし村落生活を送っている人々にとっては、これは相互に必要な最低限の生活を維持するための品物を融通し合う不可欠なシステムである。砂糖や紅茶、玉ネギなどが貸し借りされる。食料に関しては、ケレケレをした方もソリした方も、返済を心掛けてはいないし、期待してもいない。中

には例外的に、村会議長をしている土地の首長<sup>⑤</sup>のように、忘れずに借りた品物を返している人もある。彼は、他の村人と同じ生活を送りながらも、貸し借りのバランスを考慮している。彼の氏族は村に一軒しかないが、村の仕事や税金の分担を数軒かかえる他の氏族と同量引き受けている。このような行為が、彼への敬意の源となっている。

村落生活では必要不可欠なケレケレーソリの関係であるが、都会生活者にとっては今や面倒なものになってきている。村から人が出てくるたびに交通費とか酒代とか、つまらない出費を求められるので、本人のためには一切金を出さぬことにしたという例も聞く。しかし昔ながらの関係で、姉妹の子供からの要求には応じなければならぬとその人は考えている。この関係は、ヴァスと言われる特別な関係<sup>⑥</sup>で、彼らからの要求には応じなければならぬといふ慣習法になっている。動機は別だが、村ではケレケレに制限を加えようという話がきかれる。特に熱心なキリスト教徒は、怠け者には同情せず、最初は食料を分けてやっても、二度目からは畑に行つて植えるようにタロ芋の若茎を分けてやると話している。この話はフィジー人の間でよく聞かれる。怠け者を認めぬ倫理観はキリスト教に始まったことではない。死者の魂が祖先の国へ行く道中で爪ののび具合を調べられる物語もある<sup>⑦</sup>。キリスト教の倫理観は、近年ゆるんできた勤勉さを奨励するものである。

つまらぬケレケレは敬遠しても、「気前の良さ」を機会があれば示したいと望むのは、フィジー人の普遍的な傾向である。村では、食

事やお茶の時に近くを通りかかる人に必ず寄つて行くように声をかける。どんな貧しい食事でも声をかけ、やつて来れば分けて食べる。このように与えること<sup>(soi)</sup>に価値を置く文化は、都市生活を始めても失われるものではない。村単位の贈与交換の場合や、身内の結婚や葬儀には百ドル単位で提供する。また働いた金をすべて飲んでいた若者が、信仰に目覚めて酒をやめ、たまった金で船を買つて村の親類に贈つたという例がある。また個人経営の病院を営んでいる医者は、自分の氏族員のために村に家を四軒建てている。

以上述べたように、垂直軸上の関係における平民の首長に対する供与<sup>(soi)</sup>と、水平軸上の関係における返済を条件にしない一方的な贈与<sup>(soi)</sup>は、フィジーの社会関係を支える重要な要素だと言ふことができる。客観的に見れば、均衡のとれた互酬的關係であるが、フィジー人の説明では常に贈与<sup>(soi)</sup>が、強調される。特にゲストを迎えた時や、贈与交換の時の「気前の良さ」の誇示には、フィジー人の行動を規定している根本的信条(ソリのイデオロギー)が読み取れる。

#### (b) 教会組織と「気前の良さ」を誇る心情

教会は、神の前での平等を主張しながらも、首長制をそのまま認めている。メソヂスト派はプロテスタントではあるが、英国国教会的体質を持ち、首長制を当然のことと考えていた。ヴィワ島ではないが、今でも高位の首長が居る村では、教会に説教壇と同じ高さの首長用の席が設けられ、説教者が首長より高くならないようにし

ている所もある。

教会組織は、神―牧師―信者という枠組の中で、牧師と信者にそれぞれの階層を設定している。牧師は試験に合格すると見習い教職 (talatala vakatovolei) となり、三年間の教育を受け、三年間の見習い期間を任地で過ごした後按手された教職 (talatala yaco) となる。この教職にある聖職者が、教会の正式な牧師である<sup>(5)</sup>。彼らは十村内外を一単位とする教区全体を監督指導する。結婚式、葬式、洗礼、聖体拝領の儀式を行なう資格を持つ。

信者としては、フィジー人のほとんどが幼児洗礼を受けている。

青年期に堅信礼を受けて信仰を確かにする。堅信礼準備中の信徒 (siga tuberi) の後、堅信礼受礼信徒 (siga dina) となる。その後熱心な信者は教会の礼拝儀式を分担する資格を取る。信徒祈禱者 (masunasu)、信徒説教者 (dau vunanu) の両者があるが、前者は教会で信徒のために祈る (masu) 資格を持ち、後者は教会の儀礼を一切執行する資格を持ち、一般信徒の最上位に位置する。これらの村の信者の指導監督するのが信徒牧師 (vakatava)<sup>(6)</sup> である。彼らは二年間の教育を受けた後、各教区会議で選ばれ任命され、村に住む。正規の信徒牧師を持ってない場合は、村の熱心な信徒説教者を信徒牧師に任命している。この場合には月々の謝礼金は支払われない。この信徒牧師 (vakatava) までが世俗の信徒である。信徒牧師には、ヴィワ島では村から月に四五ドル (米ドルとほぼ同じ) 支払われる。教区牧師には月に一七〇ドルを、教区全村から支払われる。

ヴィワ村は、フィジーで始めてフィジー語の聖書を印刷した場所

であった。近年は人口が少なくなり、教区牧師を迎えられなかった。牧師誘致運動を数年前から続け、一九八五年一月にヴィワ村を中心に五村で一教区を形成し、新たに教区牧師を迎えることができた。村人は信徒牧師のために一軒二ドル、教区牧師のために五ドルを月々支払っている。ヴィワ村一軒の平均収入は約四〇ドルである。これでも他の村々と比べれば恵まれている方である。しかし月々七ドルを聖職者に支払うのは大きな出費である。その上、八五年には新たに迎える牧師のために一万ドルを越す家を建てた。また交通用の船をヴィワ村だけが出費して一艘贈っている。

これらの経済的側面からも、教会がいかに村落生活において中心的な役割を果たしているかが窺える。勿論これは信仰心にだけ由来している訳ではない。名誉欲とか見栄を張る気持ちが大きな影響を持っていることは明白である。その他に家計の二〇パーセント近くを聖職者に支払うような負担を、村の男達が引き受ける積極的な理由は、これといって見つからない。全員キリスト教徒ではあるが、既に体制化している信仰活動には、自分の生活を犠牲にしてまで教会に尽くすエネルギーは見られない。事実、村落生活の中心となっ  
ている成人男性は、教会礼拝と他村からのゲストの接待との選択をせまられた時には、ほとんどが迷わず接待の方を選び、ゲストと共にヤンゴナを飲む。彼らに教会への出費を促す動機は、村の力を示そうとする、昔ながらの「気前の良さ」を評価する価値観にある。

(c) 媒介者としてのマタニヴァヌアと牧師。



マタニヴァヌア (matanivanna) とは、首長と臣下との間をとりもつ媒介者であり、儀礼の場では式次第を執りしきる。村では、来訪者はまず彼の所を訪ね、首長への取り次ぎを頼み、来訪の挨拶に行く。村内で問題がおきた時、当事者は彼を通して首長に謝罪の贈り物 (bulbulu) をする。他村を首長が訪ねる時は、訪問儀礼の段取りをつける。一方牧師もまた、神―牧師―信徒という教会制度において、神と信者の媒介者として神の言葉を伝え、信者の抱える問題を神の前に伝える。そして礼拝儀礼を司る。

両者の違いで決定的な点は、前者は村を代表する首長の代弁者であり、彼の媒介者としての存在自体が、首長と臣下との間の間隔を維持する機能を果たし、象徴的でしかなかったとはいえ首長制度を支える存在となっている。それに対し、後者は首長制を認めているものの、この体制を基本的な部分から崩壊する役をになつている。平民の台頭を助長する教育、そして何よりも家庭主義、夫婦愛の強調が村人の今までの在り方を覆す要因となつている。家庭第一主義はまず都市で浸透し、次第に村にも波及してきている。他村から嫁いできた女達は、村よりも家庭を第一に考えており、牧師を囲む婦人部の集会でその考えを発表している<sup>15</sup>。これは明け方まで家庭をかえりみずにヤングナを飲んでいる男達への不満の表明であるが、男達にとっては村の一員としての連帯意識をここで表明しているのである。

家庭第一主義を積極的に説くことは、村や首長を第一に考えている村人に対して大きな方向転換を要求する。牧師の存在は、伝統主義

を主張しながら、常に変化を要求する存在であった。フィジーの地に光明―衣服等の文明と共に変化をもたらした存在として彼は常に敬意と感謝を示されている。

キリスト教以前には、神々―司祭 (ogoc)―村人という聖的レヴェルの系列と、首長―マタニヴァヌア―村人という世俗的レヴェルの系列が並存していた。後者は今でも存在しているが、以前との大きな違いは、首長―神々という等式がもはや成立しなくなったことである。しかし最近でも、首長には聖なる力があり、首長の身体や持ち物に触れた者は身体が腫れると言われている<sup>16</sup>。以前の司祭は、神が降臨して身体に入ったときにのみ、神として扱われた。その意味で司祭の聖性は一時的であり、一村民と神との中間的立場にあつたとと言える。それに対し、現代の牧師 (matata) には、滞在が三年間という一時性に合わせて、村のどの氏族にも所属せぬ故に、聖なる他所者として神との仲介役を果たす適性があるといえる。

聖なる他所者を尊重する伝統は、外来の首長を迎えたという伝説を多く持つフィジー社会では、かなり根強く残っている。威力の勝る首長が外から到来すると、先住の首長は服従を誓い、臣下となる。これは首長―神という文脈で見ると、新しい威力のある神に土地の神が服従することと読みかえることができる。しかし征服首長の即位式では土地の首長からヤングナが授けられねばならぬということ、土地の持つ力が征服後も維持されていることを含意してもいる。そしてキリスト教の到来の場合には、その文脈に従えば、威力の強い神がキリスト教の神であり、服従を誓ったのがフィジーの伝統的

な神々である。それ故、征服首長に対し土地の首長の力が保持されていた如く、フィジーの神々も力を保持していると指摘し得る。

牧師はキリスト教の神を村に存在させるべき支えとなる司祭である。牧師はまた、その存在自体が村の力を示す象徴となっている。

世俗的な見栄と、体制化したキリスト教会と、日常生活に深く根ざしたフィジー・キリスト教文化が、牧師 (talatala) と信徒牧師 (vakatawa) の存在をなくてはならぬものになっている。その欠落は、その社会の欠陥性を示す徴となる。儀礼が常に重要な位置を占めるフィジー社会では、聖的レヴェルで儀礼を行なえる資格を持つ牧師の存在の有無は、その共同体の持つ「力」の有無を示す指標と見られる。キリスト教以前なら武力がその指標となっていた。現在では牧師の存在を支える経済力が「力」を示す指標となっている。

#### (d) 社会関係とキリスト教

フィジーの村落生活の在り方自体が、キリスト教的な隣人愛の体现である。ケレケレーソリという伝統的な相互扶助システムと、豊かな食物が、怠け者を許し、フィジー人全体にそれ程働かなくても生きていけるという気持ちを蔓延させることになっている。しかしまた避難所を持たぬフィジー人は一人もいないという利点もある。もしフィジー人の乞食を見かけたとしても、それは単にインド人の乞食を真似ただけである。

垂直軸上に見る関係では、象徴的な存在になったとは言え、首長を擁して伝統的な首長制を維持している。キリスト教会もこの制度

を認め、首長の席を説教壇と同じ高さに設けている所もある。しかし、大抵の首長は、信徒の一員として、信徒説教者 (dau vunanu) の資格を持ち、信徒としての義務を果たしてもいる。また家庭第一主義は、今までの首長制や村の在り方に変化をもたらす要因になっている。水平軸上の関係では、伝統的な相互扶助システムも、キリスト教的論理からの見直しをせまられているのが現状である。

#### (3) 儀礼的關係に見られる心情

—— 伝統——首長制擁護の心情 ——

#### (a) 訪問儀礼

フィジー社会には異質なものを || 他所者 (vatabu) を受け入れる文化的仕掛けがある。それはセヴセヴ (sevusevu) という、新入者が首長から滞在の承認を受ける儀礼である。たとえ外国人であっても、この儀礼的な手続きを踏めば、公式に村への滞在を許される。

訪問儀礼には、フィジー文化の基本的な要素がすべて見られる。この儀礼には最低四者が必要である。訪問者と首長 (または村の長老)、それぞれのマタニヴァヌアである。簡略になると二者だけで行われる。その時語られるスピーチの内容は決まっている。まず首長の偉大さを述べ、今回の訪問の目的と、神を崇める言葉を述べる。受けのスピーチでは宝物を頂いたことに感謝し、神の恩恵があるようにと唱える。

訪問儀礼とは、お互いに相手をホストとゲストとして認める相互確認の儀礼であり、神の恩恵を相互に贈与し合う儀礼である。通常

はその場でヤングナを飲む。その共飲は相互の象徴的な一体化を表象する。最初は、二者だけで儀礼が行なわれていても、ヤングナを準備する段階になると若者が呼ばれ、次第に村全体の男達を集める行事となっていく。

世俗的な訪問儀礼が、村全体をまき込むような集合的レヴェルで行なわれる機会は、それ程多くない。年に一回開催地を変えて行なわれるフィジー人だけの全国首長会議 (Dose vakaturaga) は、開催地とその近隣の村々にとって全村をあげて歓迎儀礼を行なう機会となる。この時には、ホストになる村では半年前から金を積みため、氏族単位に割り当てられた贈与交換 (solave) 用の品物をそろえるために、村人全員が準備を始める。既婚の女達は大きなマットを一人一枚編む。男達は臨時のトイレや台所を建て、贈与交換用の鯨歯 (tabua) やケロシン、布等を親戚から集めたり、買い求める。

一九八二年十月末にヴィワ村に二五〇名のゲストを五日間迎えた時<sup>⑤</sup>には、右に述べた品物の他に、ゲストの食物を買うために村で千ドル積みためた。一月の平均収入は一軒四十ドル位である。その中で半年で五十ドル、他に先にあげた品物を買そろえようと一軒八十ドル位の出費となる。半年で二ヶ月分の収入を村の行事に出すことは、いくら食物が豊富にあっても、現金がいつも不足している村人にとっては大変な出費であった。

フィジー社会では、この種の負担は村人にとって義務的ではあるが、決して強制はされない。不足分が出たら、村全体で金集めのヤングナパーティを開いて、それにあてる。現金集めは、氏族単位や

村を二分するグループ単位で行なわれるため、気前の良さを見せようという氏族の名誉心や見栄を刺激し、割り当ての目標額は大抵は達せられる。

儀礼には村の男性全員がかかわる。ゲストが訪れる日には、若者が朝からヤングナの根を鉄の筒に入れ、鉄の棒で打って粉にしている。そのリズムカルな音が村中に響く。ゲストは村の境界線上（海岸か道の途中）で、まず村の代表に迎えられ鯨歯を一つ受ける。次に控えの家に案内されて旅の疲れをいやし、ヤングナを二杯振舞われる。そして首長と村の男達が待つ儀礼会場に案内される。

儀礼では、ホスト側からゲスト側へまず鯨歯、ヤングナの大きな木、丸焼きの豚やタロ芋の束が、それぞれスピーチと共に贈られる。最初の鯨歯の時には、

「首長にかなった方法で、トウイ・マズアタをお迎えます。これはわれわれがあなた方をお迎えるために準備した宝物であります。あなた方がこの親類の島に、今日無事に来られたことを、神に感謝します。……小さなタムブアしかお見せできないことをお許し下さい。宝物についてのスピーチが長くなります。トウイ・マズアタ御一行への贈り物です。」

その贈り物を受ける挨拶として、ゲスト側から、  
「……これは真の首長ロコ・トウイ・ヴィワから受け取った宝である。全ての親類であるチーフが健康で、神の恩恵がありますように！われわれの中にいますキリスト、……」<sup>⑥</sup>と述べられた。話の内容は人によって多少異なるが、枠組は先に述べた簡略な訪問儀礼の

時も、公式の場合も同じである。相手の首長とその村を誉め、自分の贈り物はささいなものであることを謝り、神の加護が相手側にあるようにと祈る。

以上の訪問儀礼からは、(i)フィジー人社会の統合の中心となっている首長制と(ii)伝統儀礼主義擁護の心情が読みとれる。

(i) 首長制擁護の心情

たとえ首長が出席しない個人的レヴェルの訪問儀礼でも、ウィワ村で行なわれる限りはロコ・トウイ・ウィワへの贈り物という形式がとられ、受け手は首長に代って受ける。村を異にする者同士の儀礼 (seusevu) では、両者は村を代表していることが分かる。首長のタイトルは、スピーチの中では、土地を表わし、村人全体を表している。一人の継承者がたとえ首長のタイトルを汚す行為をしても、逆に彼が立派な人物でも、タイトルそのもの持つ名譽に変化はない。その名譽とは、ロコ・トウイ・ウィワの場合には、一八七四年十月十日にフィジーを英国に移譲した時に署名した十三名の大首長のタイトルの一つを継承しているという事実とその歴史性にある。

(ii) 伝統儀礼主義の擁護

儀礼を厳肅に、贈り物を豊富に行なうことは、相手に対する敬意の表明である。この評価は文化に深く根ざしたもので、現金経済が浸透し、マーケットで現金を得て帰ってくるのが主に女性の役割となっていて、交換される品物にケロシン、ビスケット、布地、石鹸など現金で買う品物が加わっても、儀礼の厳肅さと贈りものの豊富さに対する評価には一向に変化が見られない。以前には贈物は土

地の産物であり、その豊富さはその土地を治める首長の力 (mana) の豊かさを表わしていた。現在でも贈り物の豊富さは、土地の豊かさを示しているが、それよりも村人の経済力即ち現金獲得力が問題になっている。この力もまた首長の力として儀礼の文脈では語られる。

フィジーでは、あらゆる集合レヴェルの儀礼は村全体を表象するものであり、首長の名の下でなされる。フィジーの首長制とは、彼らの村の在り方をそのまま表現するものであり、伝統主義を支える基盤となるものである。伝統主義とは、土地の社会関係をそのまま肯定し、それを自らのアイデンティティの拠り所とするものである。

(b) コミュニタスの伝統

(a) で扱ったのは、個人や集合的レヴェルでの公式性の問題である。一つの社会では決して厳肅な儀礼だけが行なわれている訳ではない。現代のフィジー文化の特徴は、厳肅性よりもむしろ親密性や友好性を強調する所にある。厳肅な儀礼の後には必ずホスト・ゲスト両者間の連帯感や親密性を生み出す無礼講の機会がある。

先の首長会議の場合には、ホスト・ゲスト間の境界は儀礼終了後の握手から崩れ始めた。この時には村の主だった婦人達も会場に入り、ゲストの一人一人と握手して回った。その後ホスト側の長老の中には、ゲスト達の間に入り込んで話し始める者も出てきた。ゲスト側の若者はタノアのまわりに席を変え、ホスト側の若者と一緒にヤングナの給仕をしてまわる。ここで両者の境界は視覚的に大きく

崩れ始め、ホスト―ゲストの対立よりもむしろ何処の村でも見られる年長者―若者という対立に転換した。夜は、それが更に進み、儀礼の会場では徹夜でヤングナを飲み、若者たちがギターを弾き、歌を歌う。女達がゲストの男達の膝をつついて踊ろうと誘いに来る。夜通し、共にヤングナを飲み、共に踊るなかで親密になっていく。両者間に生じたコミュニケーション的な親密感こそが、この訪問儀礼の成功を測る基準となるのである。

コミュニケーション生成に成功した場合には、送別儀礼は厳肅さの中にもなごやかさの見られる儀礼となる。送別の踊り (Baba) の最中に、ゲストの一人が女性の踊り手一人一人に一ドル札を与え、自分のつけていた巻きスカートをも与えながら、踊り手にちよつとした愛嬌のある悪戯をしかけていった。それを見ている観客が大いに喜んだ。岸で帰りの船を待っている間、村の娘がゲストの男性を両側に抱え音楽に合わせてダンスを踊る光景が見られた。これらはこの訪問儀礼が成功であったことを示している。

訪問儀礼における厳肅性と乱痴気騒ぎは、それぞれ意味論的な重要性を持っていた。同様に一月一日の午前零時を境にして、厳肅性から乱痴気騒ぎへの大転換が見られる。新年を迎える前に、その年最後の教会儀礼が行なわれる。そして午前零時に説教壇の牧師が「フレツ！」と信者とともにも三回叫ぶのを合図に、教会の木製の太鼓 (Tali) が鳴らされる。この時を境に、村の規律違反がいくつか許される。竹の筒にケロシンを入れて熱し、そこで生じたガスに点火して爆発させる竹の大砲 (Talakai) の作製と使用が子供達に許され

る。また通常は教会儀礼の開始を知らせる神聖なラリを、この時だけは勝手に叩いても怒られない。新年の午前零時からしばらくの間 (村によって期間は異なるが、普通は二週間) は、真夜中でも、ラリやブリキ缶を叩き、竹の大砲を爆発させることが許される。

村内での飲酒は常に禁止されているが、一月一日には村の長老も何人か加わって、インド人の雑貨商から購入してきたビールを飲んでいた。村の婦人達や教会の世話役はその日でもタブー違反だと言っただけだが、あえて咎めることはなかった。村の若者が全員集まったその席には、日頃尊敬を受けている村会議長と村の最年長の老人も見え、甘そうにビールを飲んでた。この日は無礼講であった。音は、連続的な時間の流れを区切る。異常な時間に鳴るラリ、竹の大砲、ブリキ缶の音は、その徴付けられた時間の非日常性を示している。通常の村落内の音は定期的な教会のラリと、村会を知らせるホラ貝の音だけである。それに対し、年始めのこれらの騒音は、日常の村人の活動が一時停止し、いくつかのタブー違反が認められる日々を徴付けている。

#### (4) キリスト教とフィジー文化主義

フィジーのキリスト教活動は、世俗の儀礼をすべて受け入れていくだけでなく、乱痴気騒ぎまでも取り込んでいる。教会は在来の文化的伝統をこのように引き継いでいるだけでなく、フィジー文化を積極的に保護、育成しようとしている。その姿勢が、キリスト教会の青年会活動では特に明確に見られる。

(a) 訪問儀礼

一九八六年二月にヴィワ教区の日曜学校の教師のための講習会が、教会本部から二人の講師を招いて開かれた。二人はヴィワ村の牧師の家に泊まることになった。村に着くやきつそく牧師の家に導かれ、ヴェランダに敷かれたマットの上に座った。訪問者は、ヤンゴナを取り出し、訪問の挨拶と一晚の世話を頼む儀礼 (seusevu) を行なった。その日の晩と翌朝の講習が終わった後、二人は村の牧師に滞在中の世話に対する礼として鯨歯 (Tabua) を贈った。この時に語られる内容は、世俗儀礼の場合と同じくロコ・トウイ・ヴィワを崇え、神の加護を祈ることであった。

プロテスタントの他の宗派<sup>⑨</sup>では、ヤンゴナを飲むことを禁じている。しかしメソヂイスト派は、ヤンゴナを使うコミュニケーション手段 (seusevu 儀礼) と、それによって成立しているネットワークを十分に活用して、当初は村々に浸透していった。現在では教会活動が逆にそのネットワークを活性化している。

日曜日の午前十時からの教会の説教のために、他の村の信徒説教者 (dau vuna) が時折招かれる。またヴィワ村が小教区だった一九八四年以前には月に一回、日曜日の夜に小教区内の三村が交互に訪問し合つて礼拝儀礼をしていた。そしてヴィワ・ウンガレイ大教区では、いくつかの村がまわり持ちで、青年部 (mataveitokani) が三月に一回聖歌、ポピュラーソング、教会劇、伝統的な踊り (make)、寸劇などのコンテストを行なっていた。

教会が地域でフィジー文化を積極的に育成保護しようとしている

態度が、このコンテストではよく分かる。伝統文化としては、伝統的な踊り (Baga) が、村の長老から青年達が習い、村内での発表会を終えてからコンテストに持っていかれる。それに対しフィジーに新しくもたらされた演劇が、教会劇の形で演じられる。聖書内の話やフィジーへのキリスト教伝来の歴史をドラマ化したものである。聖歌の歌詞はすべてフィジー語であるが、メロデーは西洋のもので、西洋音楽の普及に大いに役立っている。聖歌とドラマが教会で、メケとポピュラーソングと寸劇が村の広場で行なわれる。

この大会は、青年が村の代表者としての責任を負う唯一の機会である。主催村に着くと、その村の首長か代表者にまず挨拶に行き、青年会の代表がセヴセヴ儀礼を行なう。結婚前の若者が村を代表する形でこの儀礼を行なうのは、教会の青年会の活動を除いてはない。

(b) コミュニタスの伝統——ブレイクアップ——

年末の教会儀礼は、クリスマスと頂点とし、その前夜の二十四日まで一氏族が一晚、教会での礼拝儀礼を主催する。二十五日の早朝には、男達が村の墓場に言つて草刈りをする。このようにクリスマスに、キリスト教以前の異教徒の文脈に基づいて死者の霊が留まると考えられる墓場の掃除をすることは、キリスト教の教義に抵触している。しかしこれは一般に広く行なわれている慣習で、教会も黙認している。そしてその年最後の日曜日の当番を終った婦人部の一つの班が、牧師と信徒牧師、各氏族を代表する長老や村会議長を迎えて、宴を昼食時に催した。長老の一人が、婦人部のその班の代りにゲス

トに対してセウセウ儀礼を行なった。村会議長がそのヤンゴナを受けた。

最後の日曜の夜の礼拝(One)終了後、先程の家で、ヤンゴナが飲まれた。杯が進むにつれて主催者の婦人達からの悪戯が、上座の年長者や信徒牧師、牧師に仕掛けられた。各人の前に置かれた貝殻の灰皿が取り除かれ、代りに大きな鍋が置かれる。ヤンゴナ用の椀の代りに、スープを盛るおたまにヤンゴナを入れて、皆に好かれている老人に持っていくと、彼は驚いた顔をしてそれを飲みほす。そのおたまは彼へのプレゼントになる。

悪戯は次第にエスカレートしていき、婦人用の服がまず先程の長老に着せられ、一座の爆笑を誘った。彼も男性用の服を持ってこさせ、それを贈り主に着せて仕返しをした。婦人服がそれぞれ上座の年長者に着せられ、最後には牧師が女装させられた。

ここでは、男女の境界までも侵すようなコミュニケーション状態が現出している。そしてクリスマス朝には、祖先の霊達との交感の伝統的手段である墓の掃除さえも行ない、この世界内でも、あの世とも親密な関係を作り出そうとしている。この意味するものは、長老の一人が期せずして吐いた言葉に表わされている。「すべてが変わる時(gauna ni veisau)」なのである。年の終わりにすべてが変わり、西洋の暦の導入者たる聖職者も「変わる」時であった。この日の最高位の人物である牧師が「変わる」ことによって、象徴的に時が変わるのである。そして、新年からしばらく続く無礼講の期間への序曲となっている。

(c) 靈的レヴェル——神と神々——

(i) 中心における神との出会い

熱心なキリスト教徒は、それぞれキリスト教の神に出会っている。牧師になるようなエリートは、人生を合理的に反省して、この道を辿っているのは神の導きだったと語る。以前は酒ばかり飲んでいた若者が神に出会って改心し、熱心な信者になった例もある。また金鉱で働いていた時、仲間の一人に呪術をかけられたのを知り、必死の思いで教会に逃げ込み、神に祈って呪術から救われた老人がいる。彼らは現在熱心な信者として中心的な活動をしている。

神による病氣治癒(神との出会い)、信仰が人生肯定の契機(神の再発見)となっている事例が数多く見られるが、これらの体験や認識は、教会で中心的な役割をになう人々にとつての重要な信仰の基盤となっている。

(ii) 周辺における「神々」との出会い

現在では決して積極的には語られることがないのが伝統的な「神々」である。しかし「神々」に関する現象がおびただしく語られていることも事実である。「神々」は通常テヴォロと言われるキリスト教以前の土着の神々で、守護神的な氏族神(kalou vu)とその他の悪さをする精霊(ato)との二種類に分けられる。この分類は決して明確な訳ではないが、氏族神は祖先神としてキリスト教の神を頂点とする階層の下に現在では組み入れられようとしている。

キリスト教の神との出会いは、中心たる教会においてである。それに対し「神々」とは周辺の領域で出会い、常に問題をはらんで

いる。夜中無意識に歩き回る少年には白髪の老婆がついていけると言われる。霊の娘に見込まれた若者は、彼女が訪ねてくると癲癩の症状を示す。その時には家族全体が異様な雰囲気包まれ、義理の父は気を失い、村人の中には細身のその霊の姿を見かけたという者もいる。また父の村に新しく畑を拓いた若者に、その土地の神が怒って開墾をやめさせようとした。しかし、彼が反抗してやめないで、罰として彼を癲癩にした。

これらの霊的存在との出会いは、空間的には村の敷地外で、時間的には夜である。村内の昼間は「神」の時空間であり、「神々」は容易に進入できぬ領域である。この事実は逆に「神」の領域は常に「神々」に侵されており、フィジーのキリスト教世界は、まさに異教的な、伝統的な他界との緊張関係の上に成立していることを示している。

(iii) 両世界を体現する信徒牧師の存在

ヴィワ村の信徒牧師 (vakatawa) は、「神」を体験して信仰の道に入った。しかし霊的経験も豊富にあり、「神々」(tevoro) からの攻撃もよく受けている。彼はまさに両世界を一身に体現している境界的存在である。

彼は育った村ではほとんど学校に行けなかった。自分で勉強をしたいと思った時には、近くに聖書しかなく、それだけを読んでいた。牧師にもっと勉強するなら養成所へ行くように勧められた。養成所で彼は一番年上だったが、まだ字が書けなかった。ある日シャワーを浴びていた時突然気を失った。その後急に字が書けるように

なった。こうして神の導きで卒業することができ、信徒牧師として一村に迎えられ、次に一九八一年からヴィワ島に赴任し現在にまで到る。

彼は信徒牧師であるにもかかわらず、テヴォロとのかかわりが多い。島の低地を拓いて畑を作ろうとして、一本の大きな木を切った。その晩その木に住む二人のテヴォロが彼を襲い、彼の首を絞め殺そうとした。しかし何とか振りほどき、追い返した。

フィジー社会ではテヴォロは今だに強力な力を持った存在だと考えられており、かかわった者には何らかの後遺症が残っている。一人この信徒牧師だけが、病気になることもなく、独力で追い返している。これはまさにキリスト教の神の威力を現物呈示しているものである。信徒牧師という立場が、彼のこの状況を説明する。彼は信徒の代表として村の信者の面倒を見ているが、聖職者ではない。教区牧師になるような人間は、合理的精神を持つエリートであるから、土着的な霊的世界を自ら体験することはない。彼らはただ信者に憑依したテヴォロを神に祈って追い出した経験を持つだけである。それに対していまでも牧師のテストに合格しない信徒牧師は、土着的な精神的風土になじんでおり、霊的存在に他の村人以上に敏感であった。他にも同様な信徒牧師がいるが、彼らの場合には常にキリスト教の神が結局は勝利を得る「他界観」を呈示している。

##### (5) 結論と今後の展望

フィジー人が、フィジーに住むインド人に対して抱くイメージは、



ここに述べてきたフィジー人の特徴とことごとく対立する。彼らの日常の社会的関係は、ずっと厳しいものだと考えられている。親戚の家から追い出されたインド人の家族が、政府の建物の軒下にベッドを持ち込んで避難していた話が引き合いに出される。彼らは個人主義で、自分さえ良ければと思っている。村を作り、村のために時間と労力をさくことはない、フィジーの伝統を知らぬ、異教徒である。それに対し、フィジー人は相互扶助と客をもてなす気前の良い人間で、以前からの伝統を守り、首長をもちたて、個人よりも村のために力を尽くす、利己的でない人間であるとのイメージを持っている。村の仕事からは現金を個人的に得ることはできないが、週に二日村のために働いている。海岸の埋め立て工事、トイレの設置、儀礼の会場作りなど村への奉仕になる活動と、村の予算獲得のために、樹皮布を作る木 (masi) を植えて育てたり、ナマコを取って中国人の貿易商に売っている。

社会関係は、ソリーケレケレの基盤の上に立つ。このシステムはキリスト教的な隣人愛よりもはるかに有力で効果的であり、このレヴェルではキリスト教的な要素が今更介入する必要はない。むしろキリスト教は妻や子への愛を強調し、村から個人を引き離す方向に向いているのがキリスト教的な愛であるという皮肉な現象を見せている。

集合レヴェルでは、フィジーの伝統的文化が豊富に現出する。キリスト教会はそれを全面的に支持し、積極的に利用もしている。伝統的なネットワークを通して普及したキリスト教は、現在ではその

諸活動を通して逆にそのネットワークを活性化させている<sup>20</sup>。

特にこれからフィジー人の人口が増大し、今までのように村に帰っても土地がなくなる状況になって問題になるのがヘフィジー人主義である。全国規模の首長会議では、インド人の現在以上の進出を警戒して、国会議員の三分の二をフィジー人が確保し、総督と首相にはフィジー人が必ずなり、フィジー人の土地の権利と漁業権を確保するとのフィジー人主義の決議がなされた。最初の議員の件を除いて、後はすべて現状維持を望んでいるのである。この決議では敵は特定化されおらず、個人のレヴェルでもその問題はまだ意識化されていない<sup>21</sup>。

集会の規模が大きくなるに従って、首長制とともに表面に出てくるのがキリスト教である。訪問儀礼のスピーチは神の加護を祈ることとで終る。会場の第二位の席は聖職者の席である。彼らは儀礼が首長にふさわしい方法で執行されるのを目撃している。人々の連帯感が強まるのを教会が望ましいと考えているなら、教会もその決議を支持している事になる。

最後に、フィジーのキリスト教の世界は、それを取り巻く「神々」の世界をも含んで成立している。その「神々」の世界はキリスト教信仰を個人のレヴェルで観察するなかで見えてくる。この世界は同じキリスト教徒でもフィジー・キリスト教徒だけに独自の世界である。

結論として、社会関係を支える相互扶助のシステムは非常に根強いもので、都市に住んでも村人であることをやめないフィジー人の

第一の現実的な拠り所になっている。第二に文化的には、フィジー文化そのものを表象していると言える首長制が拠り所になっている。第三に社会関係や政治体制ほど明確ではないが、それらをも支えている精神的な拠り所は、「神」と「神々」とからなるフィジー的キリスト教世界である。このように伝統主義、首長制擁護の心情、フィジー人主義といったフィジー人のアイデンティティはキリスト教と不即不離の関係で成立している。

今後都市化が進み、人口が増え、土地の価値が増大するに従い、首長制はますます象徴的になるが、逆にフィジー人主義(ナシヨナリズム)の問題が表面化してこよう。それ故、今回現時点の問題をここに整理しておく意味がある。

#### 注

- (1) フィジー人キリスト教徒の七八パーセントがメソヂイスト、十三パーセントがカトリック、三パーセントがセヴンス・デイ・アドヴァンティスト、二パーセントがアセンブリーズ・オブ・ゴッドである。
- (2) "REPORT ON THE CENSUS OF THE POPULATION VOL.3.1976" Parliament of Fiji.1979.pp1-2. エンダマ教徒八〇パーセント、メソヂイスト教徒一五パーセント。
- (3) K.L. Gilton, "THE FIJI INDIANS" 1977. Canberra. p.1.
- (4) "Fiji Today 1984-85" Department of Information Publication. Fiji. 六七万人中、フィジー人三十万人。インド人三四万人。パートヨーロッパ人一人。中国人五千人。南太平洋の人々六千人。
- (5) Subramaniam, "The Indo-Fijian Experience" Univ. of Queensland Press. 1979. P. xi.
- (6) Derrick, R.A. "A HISTORY OF FIJI" 1974(1946). Fiji. p.53-184. 〇年頃

は、主なマタニツは、ウイテイ・レウ本島の南東に、レフ、ウェラタ、ムパウの三つがあり、ラウ諸島のラケムバ、ヴァヌアレウ島のザカウソロウエ、マズアタ、ウアなどが有名である。支配階級の家族同士は婚姻関係で結びついている。他に Routledge, David "MATANITU, THE STRUGGLE FOR POWER IN EARLY FIJI" 1985. Univ. of the South Pacific.

(7) 橋本「キリスト教と『他界観』」年報人間科学 vol.7.1986. p.93.

(8) Deane, W. "Fijian Society" London. 1921. p.123.

(9) ウイフ島には、征服者たる外来王「ロコ・トゥイ・ウイフ」がいる。村は征服者側の三氏族と、被征服者側の三氏族との二グループに一応分かれていて、両者間に地味の違いはない。ただロコ・トゥイ・ウイフとその称号の継承権保持者に対してだけ、様々な敬意表明がなされる。また土地の首長は、ロコ・トゥイ・ウイフに即位式のヤンゴナを授ける役割を持ち、村で第二位の地位となっている。現在ロコ・トゥイ・ウイフの継承者は首都に住み、土地の首長で村会議長が村の実質的な中心である。人格的にも、現在のロコ・トゥイ・ウイフよりも尊敬されている。

(10) Thomson, Laura. "Southern Lau Fiji" Honolulu 1940. pp.62-63. Deane, W. ibid. pp.4-7. Lester, R.H. "A Few Customs Observed by Fijians" in Transactions and Proceedings of the Fiji Society Vol.3. 1946. p.127.

(11) 死者の魂が、祖先達の国に辿り着くまでに途中で様々な試練を受ける「魂の道」がある。その中に勤勉かどうかを調べる「つかみ石」がある。石をつかんで爪跡が残れば怠け者である。

Thomson, Basil. "The Kalou-vu(Ancessor-Gods) of the Fijians" in Journal of the Royal Anthropological Institute. V.24. 1895. pp.340-59.

(12) ordained ministers (=talatala yaco) 15 一九八五年には「一五一」名 ministers on probation (=talatala vakatovolei) は「五八」名 休職者三四名 合計「一四三」名 である。"THE CONSTITUTION of the METHODIST CHURCH in Fiji" 1983. Fiji. p.9. Rev. Tekei, Paula. "A I VAKAMACALA NI I WILIWILI NI LEWE NI LOTU WESELE 1985." 1986. Fiji. p.2.

(13) 日本語訳に関しては「日本フリーメソヂイスト教会での名称」と「大阪日本橋キリスト教会の津村牧師からのアドヴァイスを採用させて頂いた。」

(14)これは謝罪の儀礼 (na i bulubulu) と言う。大きな問題は村会議にかかるとで村全体がかかわる。小さな問題でも首長への謝罪をすることで終始符がうたれることになる。以前は、病人が出た時にも、首長への贈物がなされた。

(15)一九八六年一月始め、教会の婦人部の集まりがヴァヌア・レウ島マズアタ地区の中心の村ナンドゥリであった。そこで牧師が一家の女王たる婦人達に金、品物、愛情、知識、時間を何にどの位注ぐかを聞いた。その結果、家庭が満点の五十点をとり、次に教会三四点、学校三二点、村三〇点、母親の会二六点、村の婦人会二四点、その他雑事が第二位の四〇点を獲得していた。

(16) Hocart, A. M. "KINGSHIP" Oxford University Press, 1969(1927). pp. 75-76.  
ホカートは首長の即位式の構造を分析するなかで、首長が神として再生すると読み取っている。

(17) 橋本「フィジーのVeiqaravi」民族学研究四九卷一号、一九八四年、pp. 27-62

(18) 橋本、ibid. pp. 48-49.

(19) セウンス・テイ・アドヴァンティスト派とか、エホバの証人のようなセクトでは、ヤンゴナやタバコなど神の宿なる身体を害するものを禁じている。

(20) キリスト教以前では、戦いの戦略として村落間のネットワークを使っていたが、現在ではキリスト教会の活動だけが村落間の紐を強化していると言っても過言ではない。

(21) 橋本、一九八四、ibid. pp. 61-62.